



蘇る、蒲生の自然

蒲生干潟と海浜

7月号

緑豊かな蒲生海浜

(7月中旬の蒲生)

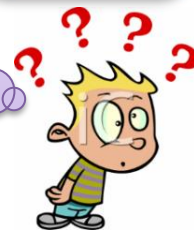


4月には枯れたアシ原だったところが、新緑のアシ原となりました。まもなく、オオヨシキリが東南アジアへ旅立ちます。

アシ原の前に生えている植物名がまだ分かりません。大きくなるまで待つことにします。



海浜のところに、種の名前が分からない植物の群落がありました。花が咲いていれば・・・？



磯（水際）の生物

干潟に架かる導流堤

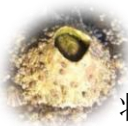


七北田川と蒲生干潟の境には、陸地から海浜へ導流堤（人工の建造物）が架かっています。

その導流堤は干潮時には海水に浸りませんが、満潮時になると一部が海水に浸ります。海水に浸るところには、磯の生物（フジツボ・フナムシ・カキ等）が生息しています。条件が揃うと、人工の導流堤にも生物が生息することが分かりました。



潮間帯のフジツボ



フジツボ（藤壺、富士壺）は、富士山状の石灰質の殻をもつ固着動物です。世界中の潮間帯から深海にかけて生息しています。淡水には生息しません。岩や船底、他の動物に固着し、全く移動しません。潮間帯の岩の上ではしばしば優占し、またはっきりした帯状分布を示すことが多いです。（Wikipedia より）

導流堤の窪みが潮間帯となります。満潮時に海水に浸るところまでフジツボが生息しています。フジツボの解説通りです。



フナムシ（船虫、海蛆）は、日本を含む熱帯から温帯の海岸に広く分布する代表的な海岸動物です。体は上から押しつぶされたように平たく、多くの節にわかれ、7対の歩脚があります。頭部には長い触覚と大きな複眼があり、尾部には2つに枝分かれした尾脚が1対あります。

天敵はイワガニやアカテガニ、イソヒヨドリ、シギ、チドリ類などです。（Wikipedia より）



海中の岩場のカキ



干潮時、水面上に露出する場所のカキ



カキ（牡蠣、牡蛎）は、海の岩から「かきおとす」ことから「カキ」という名がついたといわれています。古くから、世界各地の沿岸地域で食用、薬品や化粧品、建材（貝殻）として利用されています。

マガキは干潮時には水面上に露出する場所に住む場合も多く、体内にグリコーゲンを多く蓄えているため、他の貝と違って水が無い所でも1週間程度は生存します。

現在の養殖の方法は、カキの幼生が浮遊し始める夏の初めにホタテの貝殻を海中に吊るすと幼生が貝殻に付着するので、後は餌が豊富な場所に放っておくだけというものです。野生のものは餌が少ない波消しブロックや磯などに付着するため、養殖物の方が身は大きくて味も良いです。

カキの餌となる植物プランクトンを増やすため、栄養塩が湾に流れ込む川の上流の植林なども行われています。

(Wikipedia より)



実入りのカキ



蒲生干潟のカキはマガキかな？



蒲生干潟に架かる導流堤の窪み（潮間帯地）という狭いところでも、沿岸地域の自然の生態系の営みを見ることができます。右手には七北田川が流れています。その左手に干潟があり、生物が棲み分けています。貴重な自然環境です。

NHK 連続テレビ小説「おかえりモネ」では、主人公百音の祖父、永浦龍己はカキ養殖の名人として登場しています。百音が幼い頃、おじいさんと山で落葉広葉樹を植林した時に「落葉の養分が川から海へ送られて、牡蠣の栄養となる」とおじいさんは語っていました。

蒲生海岸は養殖牡蠣で有名な松島湾の近くです。そこで浮遊しているカキの幼生が蒲生干潟の導流堤に付着して、七北田川から流されてくる森林の栄養を得て生育しているのではないのでしょうか？

ここでも、カキの解説通りです！



余談① 牡蠣が話題となりました。

「おかえりモネ」の主人公百音の祖父の祖父のモデルは誰？

「おかえりモネ」の主人公百音の祖父でカキ養殖の名人の永浦龍己のモデルは、気仙沼市の舞根（もうね）地区で「森は海の恋人」運動を続ける畠山重篤さんではないでしょうか？海と森のつながりを実証するために、実際に落葉広葉樹の植林をしてカキの養殖に励まれています。「森は海の恋人」という著書もあります。放送開始前に畠山さんは「モネは舞根（もうね）にちなむ」と確信なさっていました。（新聞のコラム参照）

余談② アイヌの人達はハマニンニクの葉を「テンキ（小物入れ）」に活用



テンキ



ハマニンニクはテンキグサともいいます。テンキグサの名はアイヌ語に基づき、本種の葉を乾燥させて編んだ容器をテンキと呼んだことに由来するそうです。

蒲生の海浜では海沿いに群落していて、強い海風に耐えて生えています。海浜近くに住んでいたアイヌの人たちは、このテンキグサ（ハマニンニク）を生活の糧にしていたのでしょうか。

余談③ 気仙沼はアイヌ語地名？



「みやぎのアイヌ語地名」（太宰幸子著）によると、仙台以北の東北地方の川沿いや沿岸地域にはアイヌ語地名がたくさん残っているそうです。仙台市内の広瀬川沿いには「片平」、広瀬川と名取川の合流地には「日辺」など。アイヌ語地名は、その地域の土地の様子（洪水が頻繁に起きるところ、地形の様子など）を表しているそうです。防災につながる地名が多いようです。

気仙沼もアイヌ語で解けるそうです。少し長くなりますが引用します。

「日本後紀」の810（弘仁元）年10月27日の記述に、「渡嶋の狄（エゾ）が200人余やって来たが、陸奥国の管轄外の人たちだったので帰そうとした。しかし、狄（エゾ）たちは、寒い季節に海路を帰るのは困難なので、春までまって帰りたいと申し出て許された」とある。

狄（エゾ）とはアイヌの人たちことを指しており、これ以前からアイヌの人たちと三陸沿岸の人たちの交流があったと思われる。当然アイヌ語が会話に常時使用されていたことであろうから、地名にアイヌ語が残されていても不思議ではない。

アイヌ語で解けるとすれば、一般的には「kes・moy」ケセ・モイ⇒下の外れ、末端、尻・岬の陰になっているような波静かな海、浦、入江、入海」と解け、「端の入江」となるようだ。それに現在のような漢字が充てられた。

気仙沼と同じ三陸沿岸の「女川」と「雄勝」もアイヌ語で解けるそうです。気仙沼市の舞根（もうね）も漢字の意味からはどんな土地か分かりません。また舞根を「もうね」と読むのは困難です。あくまでも想像ですが、アイヌの人たちは「牡蠣がよく捕れる入江」ということを「モーネ」とアイヌ語で話していたのではないのでしょうか？

サギの雛（幼鳥）たちのその後(6/12⇒6/26)



干潟や川に単独で飛来するシラサギは、人の気配を感じると直ぐに飛び立ちます。集団営巣しているところでは、一羽も飛び立ちません。集団で休みなく大きな声で囀ることで、天敵を威嚇しているのではないのでしょうか？

この時期の幼鳥は、狭い巣の中で5羽ほどが身体を寄せ合って過ごしています。まもなく巣立ちの時を迎えるようです。

これだけ多く繁殖して、この地域の生態系への影響はないのでしょうか？天敵といえば、人が生活する地域ですからトンビかカラスぐらいです。今後の生息の様子が気になります。



巣の中のコサギ？の幼鳥



ダイサギ(体長 89cm) チュウサギ(体長 68cm) コサギ(体長 60cm)



6/12 は曇りの日で、くちばしが黒一色に見えたのでコサギと思いました。

6/26 は快晴で視界良好で、くちばしの一部が黄色く見えました。どうやらこのシラサギはチュウサギのようです。



巣を離れたゴイサギの幼鳥



ゴイサギの親は、巣に近づくと雛を置いて飛び立ちます。幼鳥は逃げません。親の身体の色と違い、幼鳥は、身体と棲み処の色がよく似ています。天敵に気づかれないようにカモフラージュしているようです。

ゴイサギの幼鳥は、巣を離れて行動しています。チュウサギとは育ち方が違うようです。また囀りも聞こえません。親鳥のような体毛になるのはいつ頃でしょうか。巣立ちの頃が楽しみです。



ゴイサギの親

令和3年度仙台蒲生日和山 山開き登山が実施されました。

1998年（平成10年）の山開き



2021年7月4日（日）、日和山山開き登山が実施されました。東日本大震災前までは上の写真のように、日和山の麓で旧中野小学校の児童による和太鼓の演奏も行われました。東日本大震災後は、なかの伝承の丘でセレモニー（和太鼓の演奏等）が行われ、そこから日和山の頂上を目指していました。コロナ禍の今年は、蜜をさけるためにセレモニーは中止。そして、招待者と一般参加者とに分かれての登山となりました。



なかの伝承の丘



復興の跡を眺めながら日和山へ



蒲生の3つの宝を巡ることができました。
防潮堤から陸側は、以前の面影は全くありません。人が住めない地域となりました。防潮堤から海側は、蒲生の自然が元の姿に蘇ろうとしています。